

住生活

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45173

7. 住生活

吉川 祐未

1. はじめに
2. 伝統的な住生活
3. 住生活の変遷と実例
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

柳田に滞在中、たくさんの住民の方の家々に訪問する機会があった。この地域に共通する堂々とした造りの家々に、訪問するたびに圧倒された。現在日本で多く見られるようなコンクリート造りのマンションに住む私にとってこのような大きな木造の家屋は珍しく、興味をひくものであった。

また、そこに住んでいる人々のお話をきいているうちに、築百年を超えるようなこれらの家々が、今も大切に住まわれているだけでなく、その役割や性格を変化させてきていることが分かってきた。

本章では、そのような柳田の住宅ならびに住生活について記述している。柳田の住宅の伝統的な間取りやそれぞれの役割、またその変遷、利用の実例などを概観して、柳田の人々の暮らしについて考察したい。

2. 伝統的な住生活

本節では、『柳田村史』(1975)や『石川のむらとくらし』(1987)を参考にしながら、柳田地域における住生活の特徴をつかんでいきたい。

2.1 柳田の住環境

2.1.1 立地

『柳田村史』(1975:936)によると、柳田地域には建築年次の古い家が多くあり、現在までその様式は受け継がれてきている。実際に調査で訪れた住宅も築年数が古く、現在の世帯主の親や先祖が建てた家に住んでいると話す人がほとんどであった。

一般に住居は小さな河谷の縁に位置し前面に水田、背後に山林を控える場合が多い。前後の水田・山林はその家の所有地で屋敷はその境に、水田より一段高いところに設けられる。家の向き

は谷の方向によって違うが、北に山を背負い、南に水田を控える場合が多い。

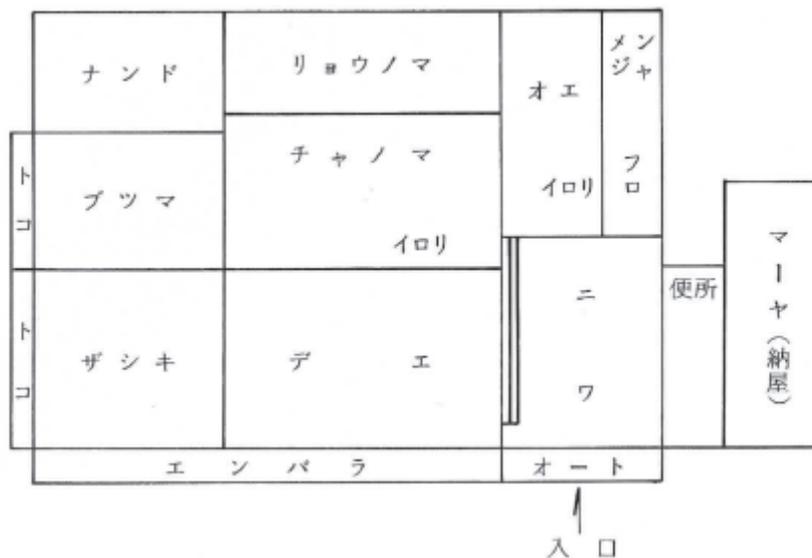
このような住居の立地には先祖の体験に基づいた様々な利点がある。屋敷が山と谷の境に位置することは農耕や山仕事の際に便利である。高みにある家は洪水から守るのによく、また山裾の湧水を利用するにも適している。北側に山を背負うことは風雪から家を守り、南に面することで日当たりもよい（『柳田村史』1975：935-936）。

2.1.2 間取り

柳田の間取りは奥能登で一般的に見られる間取りの特徴と共通的なものである。その原型は間口六間、奥行四間で一側にニワを持っている。ニワについては後で詳しく述べるが、家の入口から入ったところにある、農作業のための大きめの土間のことを指す。この間取りで、ニワを農作業用、家の前半分を接客用、そして後ろ半分を家族の生活スペースとして使っていた。

現在一般の間取りでは、旧来の間取りが複雑化している（『柳田村史 1975:941-942 および下の図1参照）。

図1 能登の住宅の一般的な間取り（『石川のむらとくらし』1987:85より）



2.1.3 各部屋の役割

ニワ

家に入ったところにある土間で、家の中では農作物を収納し、農作業をする場。稲の収納、稲こき、農産物の出荷や取り入れや糞仕事などをここで行った。

台所といろり

台所とは、ニワに接する広間のことである。オイ・オーイ・オーエなどとも呼ばれることがあ

るが、柳田では台所（ダイドコ）と呼ぶのが一般的であるようだ。平常はここが家族の日常生活の場であり、食物の煮炊きや食事、夜なべ仕事などもここでされる。気心の知れた来客の場合はここで応対される。

オエには必ずいろりが切ってある。多くがオエの中心土間寄りに位置し、煮炊きをしたり、暖をとったり、また夜なべ仕事の灯りなど多目的に利用された。

台所に切られたいろりには使用区分がある。仏間を背にした場所がヨコジャ（横座）で、主人の場である。その隣の入り口側がオトコザ（男座）と呼ばれ、来客用の位置である。その向かいがカカザ（女座）で主婦の座、横座の向かいはシモジャ（下座）で息子の嫁が坐る。薪はこの下座の側におかれる。

いろりが部屋の中央でなく土間寄りに位置するのは、梁が十文字に組み合わされた真下に横座が来ることをさけてのことといわれている。炉の下には四角い木製のタゴ（ヒノアマ）をつつて、ここから自在鉤をさげる。タゴの上は物を乾燥させるのに使うこともある（『柳田村史』1975:942-944）。

メンジャ

庭の後半分に造られているメンジャ（流し場）は、調理・洗面・浴場といった主に水まわりの機能を果している。ここには水ブネがあり、外から川の水や清水を引き込んでいる。井戸のある家はごくわずかであった。メンジャには、棚・流し台・風呂桶・カマドなどが並べられており、漬物桶なども置かれる。風呂は五右衛門風呂が主流であった（『柳田村史』1975:942-944）。

デイとナンド

デイ・デエは座敷のことで、平常くつろぐ部屋よりも少し改まった部屋を指す。田の神様などの年中行事や冠婚葬祭の場であり、大事な来客の時にも使われる。床の間があり、神棚、年神、仏壇などが設けられている。

ナンドはデイの反対側の部屋で主として夫婦の寝室に使われる（『石川のむらとくらし』1987：95-96）。

茶の間

かつては台所の機能をになっていた。今では平常はあまり用いられないが、宗教行事や来客の接待の場として使用される。大きな家になると、茶の間の奥にジョノマ（リョーノマ）があり、嫁入り道具を置いたり、子どもの勉強部屋などに使ったりする。一般に屋内は暗いが、暗い家は金がたまるといわれているという。ここには神棚が仏間を背にして設けられ、その下に年末に商人の売りに来るホーライ（能登の神棚に見られる、紙でできた正月飾りのこと）やカレンダーなどが掛けられ、柱時計も置かれる（『柳田村史』1975：944）。

仏間

茶の間の方に面して仏壇が置かれた部屋。能登は一般的に浄土真宗の信仰の厚い地域であり、仏壇は大きく、立派なつくりをしている。仏事の際は屋内の仕切りをすべて取り払い、仏壇を中心に行事が営まれる。仏間はその際に都合のいい場所に位置している（『柳田村史』1975：945）。

ザシキ

来客の接待用の部屋。家の中で最上の部屋とされ、坊さん・改まった来客の場合に用いる。床の間は二間あるが、古い型の家はそのうち一間が押し入れとなっているようである（『柳田村史』1975:945-946）。

ウマヤ

馬を飼うための小屋。一般にはマーヤと呼ばれ、川下の位置に設けられ、ニワから土間の廊下を通して別棟になっている。ウマヤが川の下流、すなわち低い所に建てられる慣習はウマヤを不浄と考えてのことだといえる。衛生上別棟となっているが、本棟と廊下でつなげているのは雪深いこの地域での管理の便を考えてのこととみられる。

ウマヤは広く、農具・干し草・茅なども置かれている。現在では、ほとんどが牛の飼育に代わっている（『柳田村史』1975：946）。

3. 住生活の変遷と実例

本節では実際に住民の方に行った聞き取り調査をもとに、柳田の住生活の実態と変遷、またその背景について考える。

3.1 住生活の変遷

生活様式・生産活動の近代化に応じて、住居の改善が問題にされ、改善が徐々に進められてきた。『柳田村史』によると、生活面ではガラス戸の使用や水回り（メンジャ）の改造が、生産活動の面では作業場や厩の改築などが目立った変化として挙げられるという。中でも改造の著しいのは屋根で、瓦屋根の普及について言及していた。

3.1.1 電灯の普及

柳田村にはじめて電灯がついたのは、金沢市で点灯された明治33（1900）年よりもはるかに遅れ、大正年間に入ったころであった。柳田の電灯は能登電機株式会社の経営で、宇出津から電線を伸ばし、大正14（1925）年上町・天坂・笹川地域につき、そこからさらに石井・国光・笹川まで伸びた。翌年の大正15（1926）年、小間生・長尾・鈴ヶ嶺・五十里地域まで点灯した。これとは別に、黒川方面では黒川発電所からの配電で、大箱・黒川・極楽寺に配電された。大正14（1925）年8月のことである。

この後電線は久しく伸ばされず、無灯部落は長い間不便な状況におかれた。昭和22（1947）年に当目、23（1948）年北河内・合鹿、29（1951）年に桐畑、36（1961）年に笹谷が点灯された。

中斉・神和住においては神野方面からの電線によって昭和20（1945）年に点灯した。以上のように、柳田地域の電灯の普及においては地域的に著しい差が存在し、無灯部落が消滅したのは戦後のことであった（『柳田村史』1975：953-954）。

3.1.2 瓦屋根の普及

茅葺の屋根を瓦葺に変えることを「ヤナ上げ」という。昭和に入ってから瓦屋根の普及によって、茅葺屋根の家では、結（村落の中での共同体の単位）による茅の葺き替えが困難になり、それがますます瓦葺屋根への改造に拍車をかけたという（『柳田村史』1975：948-949）。

3.2 住生活の実例

Aさん（笹川 男性 80代）

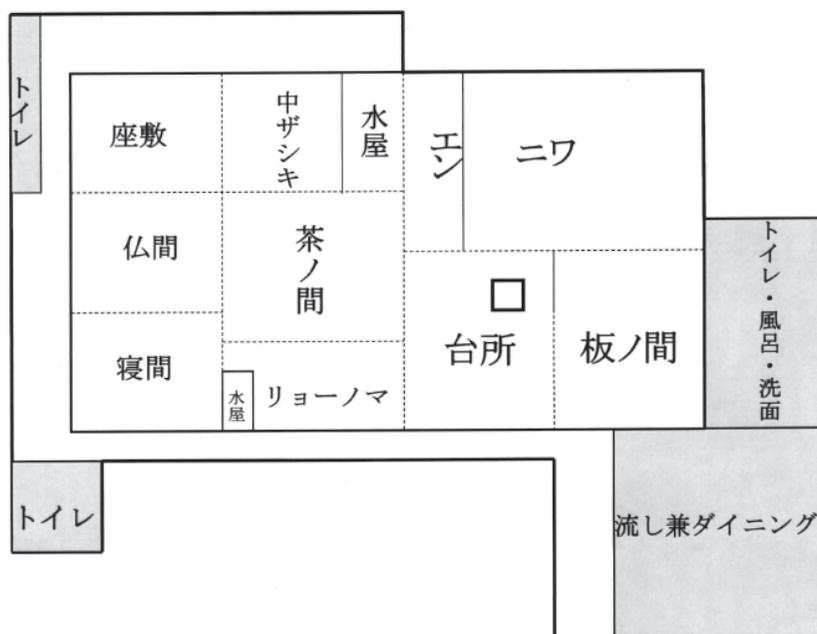
図2はAさん宅一階部分間取り図である。増築部分には色を付けてある。

Aさん（笹川 男性 80代）は、現在の家に妻と二人で暮らしている。

現在のAさん宅は築200年ほどである。代々地主（オヤッサマ）の家だったので、大きな造りの家だったが、建て増しによってさらに面積が増えている。

建て増しや改築のほとんどはAさんの父親の代（今から30年から40年前）の時に済ませている。主に、トイレ・水回りの改築、ダイニングの増築、土間から板の間やコンクリートへの改築、屋根の葺き替えなどが行われている。

図2 Aさん宅一階部分間取り図（Aさんの書いた図をもとに筆者作成）



改築前に土間であったのは、現在コンクリートになっているニワと、板の間になっている部屋である。

ニワは、収穫期には刈った稲わらを乾燥させるのに使った。その端のエン（縁）と呼ばれる部分も集めた米俵を「当座に」おいておくのに使われたそうだ。

現在板の間となっている部分は、改築前は炊事場・風呂場といった水回りであった。昭和の初めごろに笹川に水道が通るまでは、水を山からひく「水ぶね」という仕組みで、水を豊富に使うことができていた。当時は井戸水が主流だったため、このように潤沢に水が使える家は珍しかったそう。近所の人が「お風呂つかわしてください」と言って家の風呂をつかいに来たと A さんは話している。板の間になった現在は、冷蔵庫を置いてある。普段生活している台所から奥の流し兼ダイニングへの通り道になっているが、部屋としての利用はしていないようである。

戦前は台所が板の間であったが、戦後に畳をひいた。現在はこの台所が主な生活スペースである。A さんの父親が、流し兼ダイニングを増築した当初は、ここを生活の中心とする計画であったそうであるが、「寒いので、今もやはり台所をつかっている」そうである。台所にはニワ寄りの一角にいろいろがあり（写真1）、お正月やお盆など、来客のある時には今も使う。A さんは母親がお茶の先生をやっていたことがあり、ほかに中ザシキ、座敷、茶の間、リョーノマにもいろいろがあったが、現在は埋めている。茶の間には自在鉤が今もさげてある（写真2）。

A さんは昭和 35（1960）年にこの家で結婚式を挙げた。その時の三々九度などの儀式は仏間で行った。A さんの父親の代くらいまでは葬式や結婚、アエノコトや七五三の儀礼も自宅でやって



写真1 Aさん宅の台所に現存するいろいろ



写真2 Aさん宅茶の間の自在鉤

いたが、Aさんの娘の結婚式（詳しい年は不明）や、おとし（2013）の母親の葬式は式場で行った。

Bさん（金山 男性 70代）

金山のBさんは、母親、妻、息子夫婦と三人の孫とともに暮らしている。

自宅は建ててから100年ほどたつ。屋根は建てたときから瓦屋根で、当時は珍しかった。家を建てるときは、木挽様（木材を切り出して用材に仕立てる職）が一冬泊まり込んで材料を切り出した。

Bさんが退職してから台所やトイレなどの水回りと居間を造り替えた。座敷はそのままが好きなので変えていない。

Bさんの母親は、大正7（1918）年に百万脇に生まれた。昭和9（1934）年頃百万脇から金山の今の家にお嫁に来た。嫁入りする前の百万脇には当時すでに電気が通っていたのだが、金山に電気が来たのは戦後の事だったので、嫁入り当時は電気がなく、Bさんの母親はびっくりしたそうだ。

Cさん（石井 女性 70代）

Cさんは現在の家にひとりで暮らしている。

家は昭和28（1953）年築。建ってから62、3年たつ。最初屋根はコバ葺き（板葺きの屋根のこと）だったが、昭和35（1960）年頃に、瓦にふき替えた。平成18（2006）年に一度瓦の葺き替えを行っている。

家は、お金がたまとその都度部分的に改修していった。トイレを水洗にしたのは、下水道が整備されてすぐの事だったので、1989年の昭和から平成に元号が変わる頃だったと思う。

今は、ニワに続く客間と、その奥の座敷、台所が主な生活スペース。一人で住んでいるのでほかの部屋を使わない。「ヨバレ」の時などに座敷の戸を外して使う程度。家は広いだけで不便。先祖が建ててくれたものではあるが、今の生活には広すぎる。

Dさん（金山 男性 70代）

Dさんは、妻と二人暮らしである。

家は、くぼんだ土地に建っており、森林や、先祖が植えた竹に囲まれている。家の屋根は建てた当初からかやぶきで、その上に鉄板を敷いてある。茅自体は、30年ほど前からのものである。家の周りの竹が東からの風からその屋根を守ってくれている。しかしくぼんだ土地に建っているために、冬には雪が大量に積もってしまう。

オイにはかつていろりがあったが今は埋めてしまった。

現在トイレが置かれている場所は、かつてはウマヤにつながる廊下があった場所である。常の間はかつて庇の下にあった廊下の範囲を広げ部屋としたものである。

金山に電気が通ったのは昭和24（1949）年のことであった。それまではガス灯や角灯（ランタン）が使われていた。

Eさん（米山 男性 80代）

Eさんが20歳、昭和25（1950）年のときに今の自宅ができた。建てた当時から瓦屋根だった。

当時は三世代で暮らしていた家がほとんどだったので、柳田には大きい家が多い。しかし、今では家族の数が減ってしまった家が多い。

この部落でも、5人家族は一軒だけになってしまった。

Fさん（重年 男性）

家は地元の木を使っていた。家を建てるために木を育てていた。木挽さんが、柱にする木や梁にする木、板にする木などを目利きしていた。しかし、今は柳田から大工さんや木を切る人、木挽さんや製材の場所もなくなってしまった。地元の木も使わなくなり、木の価値もなくなってしまった。家にある納屋の屋根はコバ葺屋根だが、その上に瓦をおいている。

柳田は水洗トイレの設置が早く、昭和40年半ばごろから始まった。1、2万円くらいで設置できた。下水道の設置も早かった。

Gさん（笹川 男性 80代）

柳田は電話、電気、水道、下水道、水洗トイレなどの生活設備の設置が他の集落に比べてとてもはやかった。自分が6歳の時、昭和11（1936）年頃には、水洗トイレになっていた。

Hさん（石井 男性）

家を作る時は、自分の山の木を使っていた。しかし、木を切ったり乾かしたりする暇を考えると、木を他から買って家を作っても値段は変わらない。だから石井に住んでいても企業に頼んで家を建てる人が多い。

Iさん（石井 男性）

茅葺のころ、結で葺き替え作業を行った。屋根ふきのお弟子さんが各集落にいた。親方が作業の中で次の世代に教えていった。

コバ葺はわかる人でないとできないため、限定された何人かに、お金を払ってやってもらう。コバの上に瓦をのせる家もある。

栗のコバは長持ちするが、杉は作りやすい反面割れやすかった。

4. 考察

以上資料や聞き取り調査をもとに、柳田の住生活の特徴とその変遷についてみてきた。

住生活について概観することで、柳田の人々の様々な生活が見えてきた。大きなニワや仏間を

中心とした間取りは、柳田の農作業中心の生活、仏教に対する信仰の厚さがうかがえる。

多くの年中行事や通過儀礼の場でもあった家は、ふすまを外して各部屋の結合が可能な田の字づくりなど、人が集まれるような工夫が間取りにも現れていた。

聞き取り調査を行った家の中では、このようなたくさんの部屋を持つ間取りの家屋を持って余しているような声も聞かれた。柳田地域の住民のおおくは60歳以上の夫婦世帯であり、葬式や結婚式といった行事も外部化した現在では、それも無理からぬことであるかもしれない。ニワの壁に手すりをつけたり、水回りの改築時にバリアフリーにしたりするなどといった改築がしばしば見られたことも、住民の生活の変化として見ることができる。

5. おわりに

本章では、柳田の住生活や住宅の現状について、住民の方々のお話を中心に報告してきた。柳田に滞在中に聞いた様々なお話から、代々この土地に住んできた人々の暮らしに対する真摯さ、能登の豊かな反面厳しくもある自然に対する忍耐強さを感じた。現代の暮らしと伝統的な住宅の間にギャップが生じている面もあるが、このような人々の姿勢は今も失われていない。私にはそれがとても魅力的に映った。

調査中、住宅というとてもプライベートな事柄にもかかわらず住民の方々にはとても詳しくお話をきかせていただいた。この報告書を作成することができたのは偏に柳田の皆さんのご好意と根気強いご協力のおかげである。末筆ながら心から感謝の気持ちを伝えたい。